

佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学会
〒290-02 市原市今宮1110-1
☎0436-36-7611
発行者 星 見 吉 英
編集者 三 股 金 利

昼下がり

二 股 金 利

誰ともなく始めたキャッチボールのペアが日増しに多くなり、昼休みの芝生は和やかである。天気さえよければ毎日のことなので、このひとがと思うほどの上達ぶりに感心する。

スポーツの秋にふと考える。この人達の活躍の場が随分広がったものだ。ゆうあいピック・芸能：「この人達に付加価値を付けることが私達の仕事」彼等とのいろいろなつき合いの中で培われ、生活の中で共感出来るものがあるということが大切。とある施設長の言葉である。

自己選択・地域生活。彼等自身が主人公であるとの考えに施設の生活も様相を変えつつある。しかし、この「フィーリング」の良い言葉に若干の心配も無きにしもあらず。一時重度化・多様化・加齢化の問題が事あるごとに聞かれた時期があった。流行語とまで言われた。そのうち具体的な改善策も見えないままノーマライゼーションの波にのみ込まれてしまった。考えてみれば過去の流行語よりも自己選択や地域生活実現のほうがはるかに難題ではないか。

地域生活の柱である生活ホームやグループホームも携わってみると、まだまだ解決しなければならぬ問題がたくさんある。地域生

活には多様なサービス形態が不可欠である。

スポーツも芸能もその機会を得られる人はまだ限定されている。自己の障害も覚知できずハンディを負っている人にどう対応していくのか、依然各施設独自の対応に委ねられている。

施設生活を否定的に考えることだけでは、解決の糸口はつかめない。同時に他の道を整備しなければならぬのである。やみくもに地域、地域というだけでは真の豊かさはもたらされない。倫理・倫理と言ったが如し。私の反省でもある。

理念の崇高さに揺らぎ、自信を失い、右往左往しているような気がしてならない。彼の施設長の生活の質を追求する姿勢に再考のヒントをみたりというところか。

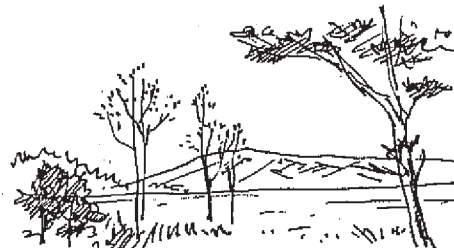
彼等が選択したことが最善との考え（誤解のないように断っておきたいがそれを尊重していいわけではない）はその力がある人に言える事であって、その準備を何処で誰がするのか問題ではないのだろうか。

完結のないこの仕事にまたとりかかる。

昼休みが終わり、グローブやボールを各自片付け、職員が昼寝から醒める頃には自分のグループに戻っている。それがルールであったが習慣として馴染んできたように見える。これで自然なのかもしれない。

快晴の午後に。

(指導係長)



父の樹会の一員として

田川 正浩

今年十一月で二十二才になる長男浩平が生まれてから小学校、中学校に進む間、自閉症という知的障害者の父親でありながら「男は仕事第一、子供の教育は母親の役割」と息子のことは母親に任せきりにしてきた。その私が子供の将

来に主体的に取組もうという気持ちになったのは千葉大学教育学部付属養護学校の高等部にお世話になってからです。入学前の面接で当時の中坪副校長から「当校では諸活動の企画・運営に父親の積極的参加を求めます。その覚悟があるのなら入学申込をしてください」と言われたことが今までの子供の将来に対してのかわり方を大いに反省させられるキツカケになりました。

千葉大養護には在校生と卒業生の父親達で組織する「障害児者の将来を守る父の樹会」(以下父の樹会)があります。卒業後、就職できなくても働く場があるように就職し失業しても戻ってこれるように、仲間との楽しい交流(レクリエーション)の場があるように、卒業後のアフターケアという形で生活を支えていくことを目的に昭和五十三年に設立されました。

そして、昭和六十二年に通所更生施設「あけぼの園」を、平成三年に福祉作業所「父の樹園」を、平成八年にはワークホーム「あおば工芸館」を開設してきました。現在では、新しい計画として平成十年の開設を目指して「居住施設」の建設に取組んでいます。

私は父の樹会では研修開発部を担当していますが、これからつくる居住施設の参考にさせていだこうと施設見学会を企画し、昨年十二月にある里学会を総勢七十五名で見学させていただきました。その時、里見施設長が短期入所事

業について、「親に何かあった時に突然入所させるより親が精神的身体的に健康な時に入所経験を持つておくと、いざという時、本人も親も施設側の三者とも安心して対応できるのです。どうぞ気軽に利用してください。」と言われたことを思い出し、息子をこの半年で三回短期入所させていただきました。一回目は今年三月、生活能力訓練(ふれあいホーム)を受け

るために五日間入所しました。息子にとって家族と離れて生活するのは初めてのことでしたが、良い経験になったと思います。二回目は八月、ふる里学会の居住者が親元に帰る盆休みに在宅者対象の合宿(二泊三日)があるとの案内をいただき、参加しました。そして三回目は九月です。突然妻が胆石の手術をする事になったのですが、入院期間中はふる里学会のショートステイを利用していただきました。過去二回短期入所していたので、息子のことをよく理解していただいております。

今更には息子のことをよく理解していただいております。今更には息子のことをよく理解していただいております。今更には息子のことをよく理解していただいております。

父の樹会がつくる居住施設もそこに生活する人達のためだけのものではなく、ショートステイやグループホーム等地域で生活する人達のための支援サービスを行う拠点になればならないと考えています。

お邪魔しました

堀金 兼太郎

普段から寮生さんの生活の場を自分の職場としていることに對して疑問を感じることなく働いてきた。寮生さんの立場になつて考えることを心がけ、接してきたつもりでいた。それは入所者の方にも短期入所の方にも付き合ひの長短に關係なく同じようにしてきた。しかし、それはもしかしら自分の職場であるという心のゆとりと若干の慣れがそうさせてしまったのかもしれない。

しかし今回のしもふさ学園との交換研修で、様々な事に気付くと言ふよりは教えられた気がした。一週間、寮の一室に暮らし、寝起きを共にし三食同じ物を食べる。しかし、慣れない環境で暮らすと失敗は付き物で、例えば食堂で何処に座つて食べようかと思ひ、空いている席に座つたつもりが遅れてきた寮生さんにそこは自分の席であると注意されたりする。つまり私は彼等にとつて非日常の存在であり、私にとつては非日常の空間であつた。そんな中、私は何を学び、何を感じ取るのか。もはやふる里学園の指導員としてではなく、一人の人間として恥ずかしいようにしなければ、そんな気持ちになつた。普段、独り暮らしをしていて洗濯物が溜つたり、食器が使ひ放しであつたりも、少なからずある。しかし、学園の寮生さんはしつかりとそれらをこなしていた。職員の方々の適切な援助があればこそなのだろうが、そこには確かに彼等なりの生活空間が存在していた。

そして、自分の今までの仕事について思ひ返してみよう。集団生活の大切さ、同じ目の高さなどと言ひつつ、私は彼等の生活にどれだけ理解を示し、入り込めていたのだろうか。慣れてしまつてゐるがために彼等に出来ることを見過ごされてはいないだろうか。職員さんと寮生さんの中間的な立場に立つてみて双方から学び取るものは大きかつたように思ふ。担当になつて下さつた職員の皆さんからは丁寧な説明とご指導の下、各業務を勉強させて頂いた。寮生さんからは集団生活の必要性と難しさを改めて教へられた気がする。学んだこと、感じ取つたことは今後の仕事で是非、活かしていきたいと思ふ。学舎に帰つて一週間は無駄だつたなどとは言われないように、体験した事と今後について考えながら帰路についた。

気分一新、いざ学舎に戻り皆の前に姿を現すと、「あれ?一週間も何処行つたの?」キツイ冗談だつたが、帰つてきたことを実感した瞬間でもあつた。

驚くほど透き通つたマリンブルーの海。水中メガネで海をのぞけば、目の前を熱帯魚が泳いでいる。白い砂浜に目を向けると、砂の上にゴザを敷いて白人が肌を焼いている。女はもちろんトップレスである。過去に数回ヌーディストビーチで泳ぎ、トップレスぐらい見慣れたものだと思つていたが、初めのうちはかなり気になつた。砂浜で寝ていてもついチロチロと横目で追つてしまつたりなんかして、ふと視線を感じた女の子が、イヤ〜ネという表情でにらみ返しバツの悪い思いをするのである。しかし、そのうちに胸を見る眼が、足や手や肩や顔を眺めるのと同じ視線になつてしまふ。逆にビキニを着けて浜に寝ころがつてゐるのを見ると、違和感を感じてしまふようになる。でも、落ちていた視線になると少し哀しいものを感じてしまふ。浜辺のレストランで、目の前の女の子が胸をブラブラさせているのを見ながら平気で食事ができるようにになると、胸の谷間を覗いたくらいでドキドキしていた頃が遠い昔のように懐かしう感じてしまふ。何か大事なものを失つたような、仙人に一つ近づいたような……

慣れというのは恐ろしいものだ。日本の日常に何の疑問も感じず、学舎の仕事も月日とともに落ち着いてきた。だが、違つた側面から見ると初めて気付かされる。時間の感覚もこんな感じがあつたのかと。ある社会の常識が、周りから見ると非常識。今の僕に当てはまつていないかと自問する。慣れるということとは、ある面感覚が麻痺したということだろう。それを良くするも悪くするも自覚次第。時には一歩ひいた立場で、客観的に見る必要があると思ふ。金ピカの仏像にただただ手を合わせていた。所変わつて、大道芸人をひやかす気分で見物していた時のこと。紺碧の空がみるみるうちに暗雲に覆われ、凄まじいどしゃ降りの雨に見舞われた。歩いている人はさつと軒先に立ちすくみ、ただ一点を見つめるばかり。すべての動きを止め、雨は車道を川のように洗い続ける。僕は近くのパラックに飛び込み、食事をしながらブラウン管に映るムエタイの試合に興じていた。食事が終わる頃には、つい今し方

もうひとつの時間

(熱タイ夜)

堀口 貴宏



の雨はまるで嘘のように再び抜けるような碧空へと戻つていた。雨季の日常の出来事である。雨上がりがまた素晴らしい。全ての汚れを一挙に洗い流したかのようになり、大気はすがすがしく、木々の緑はみずみずしい輝きを見せる。虹でも出ようものなら……

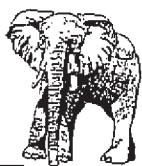
その日の夜、人の流れに沿つてあてもなくブラブラと歩いていた。氾濫するように並ぶ露店や街中をかつ歩する小衆、鼻に付く香辛料の匂い、すべてがダイレクトにとびこんできた。しかし、それにしてもこの街は騒がしい。「とにかくうるさい」この一言につきる。オートバイはマフラーをつけずに走り回り、トゥクトゥクと呼ばれるタクシーは爆音のよな音とともに行き交う。道路を埋めた人と車。排気ガスの熱と匂いで街中がムツとしてゐる、そんな感じだつた。

こうした喧騒の中、人々の熱気とうだるような空気に身を委ねてゐると、次第に底無し沼に踏み込んだような奇妙な思ひに襲われてくる。動く意欲がなくなり、その場に身を置くことに心地好さを覚える。それが異様な興奮やら、何ともいえない不安感となり全身を浸食していく。この時の空気は何だつたのだろうか。

ビビ島の最後の夜、砂浜に寝ころがり飽きるまで星を眺めながら、指の間からこぼれ落ちる砂の感触にただひたすら浸つていた。



やせがまんのススメ



「体育祭やるなら自殺する」こんな思考回路の若い人が増えたのか、同様のことがまた起こつた。社会から逃げ切れはしないのに。受け身に立つたら人間弱い。だから自分から殺小路を染しもう。窮鼠の体。そこでちよつとやせがまんをするのである。佑啓もその所産?

三股 金利